

# 農商工連携で加子母フォーラム

第一次産業と中小企業が連携して新商品や新サービスを生み出すことを目指す「農商工連携」プロジェクトのうち、数少ない林業部門で採用された国産材住宅プロジェクト。岐阜県・加子母のひのきを首都圏での住宅に使う仕組みを構築しようと取り組む関係者が集い、加子母フォーラムが開かれた。

## 中津川市長 大山耕二氏

加子母は、岐阜県中津川市の一番北の方で、平成17年に8市町村が合併し、それ以前の加子母村が現在のの中津川市加子母です。

加子母では、伊勢神宮の式年遷宮に用材を出させていただいています。「ご神木の里」ということで、「東濃ひのき」というブランドで通っています。ハウスメーカーの力が強く、地元の方になかなかお金が落ちないという状態で、今苦戦しています。

外材が安いということが要因の一つですが、そんな形で今は木の流れの多くの部分をハウスメーカーでやられていますが、私もそれはそれを「産直住宅」に変えていきたいと考えています。

具体的には、素材としての材木を産地から直送していくということ。もう一つは私どもの土地には大工さんが今も活躍されていますので、その「匠の技」も産地直送で、「素

材」と「匠の技」を産地から直送するという形で住宅に託して、山を元気にしたいと取り組んでいます。

## 中小企業庁長官 高原一郎氏

中小企業庁には色々な仕事がありますが、その一つに中小企業の方の新しいタイプの仕事を世の中に広めるという仕事があります。

そのテーマで2年半前に始まったのが農商工連携という活動です。農商工連携では、農林漁業者の方と商工業者の方が組んで新しい取り組みをする場合に、補助金などで応援する政策です。

## 株式会社丸二・代表取締役 渡辺偲規氏

丸二は東京・吉祥寺で建築業をずっとやっておりまして、今年で58年目に入りました。公共工事が主体の建設会社でしたが、20年ほど前から行く先々で公共工事だけでは厳しくなるという見通しがありましたので、それから一生懸命民

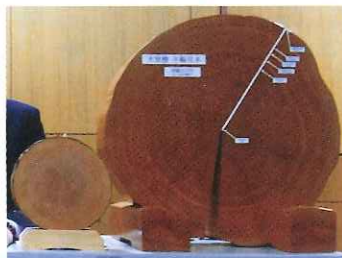
間の工事をやっていくというところで、現在ではほぼ100%民間になってきたところです。

創業当時は私の父と祖父が一緒に立ち上げ、木造の建築から始まりました。時代と共に木造の仕事が少なくなっていく、鉄筋コンクリートの建物などが主体の会社になってきました。私も父から代を受け継いで14年目ですが、やはり家を造る仕事、建築に携わっておりますと「木の家を造っていききたいな」という思いがありました。そんな矢先、3年くらい前に、宮澤さんのご縁で加子母森林組合の内木組合長と出会いました。

## 加子母森林組合代表理事組合長 内木篤志氏

加子母はひのきの産地として一時名を馳せましたし、「私達の育てている木は日本で一番だ」という事を思いながらやっております。ところが加子母のひのきといえども、だんだん全国と同じくらいの値段になってしまおうというところで、本当にこのままでは困るなと思っております。

そんな時、「山を育てる」ということを理解し、しかも木を使っていただけるといふ丸二の渡辺社長に出会いました。今までは伐って、また新た



に植え、50年60年育てて、また柱として使う。それが林業だと思っておりましたが、これからはそうではなく、継続的に山を守って循環させていく為のひとつの過程の中で、順々に生産して使っていくという取り組みでいくことができれば望みが出てきたと思っております。

今日は、会場に模型を持ってきて展示しました。16-18センチになった木は柱材として充分に使えますし、一定の山を守るだけの準備も出ます。けれども12-13センチといった太さの木は、昔はバタ角と言って土建用の型枠の材料とか、三寸角でひよろひよろの家を造る時などは使われたようですが、最近はそのような需要もほとんどなくて、山に放つたらかしです。

というのは、一本5000円くらいにしかならないので、山から運び出すとどうしても500-600円経費がかかってしまうので、山に捨てられてしまうのです。それをあえて持ち出して9センチの角材に

して、それをくつつけて18センチの外壁と内壁を兼用するような使い方をしてみようという取り組みを始めました。

まだまだこれからですが、これをパネル材として大臣認定が取れば、使い道も増えていくのではないかと考えながら、現在山づくりを進めています。

## 前林野庁長官(現農水産業協同組合職員保険機構) 島田泰助氏

日本は国土の約3分の2が森林に覆われていて、その森林の中の4割は人工林という状況になっています。その人工林も戦後に植えられた人工林がほとんどだと思っただければ良いですし、その由緒もスギ、ひのきが大半です。

勿論北海道や長野などでは開発もありますが、日本の林業はそういう状況の中で非常に問題になってきているのは、戦後に植えられた人工林がちょうど間伐をした材等が使えなくなる状況になって

きているということと、なかなか用途がきちんと確保できないので間伐の経費が出ないという事で、間伐自体が遅れてきているという状況にあるわけです。

ご存知のように山の木、特に人工林は、ある程度密度を調整してあげないと山の中が暗くなって、非常に元気が無くなってくるのです。ですから、山に活力を戻してあげる為にも山の木を使っていくということが凄く重要なテーマになってきております。

最近では、地球温暖化問題で6%の二酸化炭素の吸収目標削減目標というのが日本の京都議定書の中で掲げられております。森林吸収源でその3.8%をカバーするという事になっており、その関係から最近の間伐促進に非常に力を入れてきました。その結果、山では間伐が行われます。木が伐られる。でも使ってもらえる所が少ないとなると、間伐したものほとんど使われないまま山に放置されるという状況も出てきているという

のが現状です。

ですから、丸二の渡辺さんや加子母の内木さんが仰ったように、何とかして商業ベースに乗るような仕組みを作って、やはり都会の方達に若干の応援をしていただきながら、日本の山を良くしながら日本の資源を使って、環境に良い仕組みを作っていくということもすごく重要になってきているということです。

## コーディネーター/NPO法人 農商工連携サポートセンター 大塚洋一郎氏

この2年半で農商工連携に396件の認定があり、法律としてはかなりヒットしたものだと思えます。

ただ、その396件の中でも林業はわずか19件全体の5%にしか過ぎません。森林というものは1年でする農作物と違って非常に長くなるので、商品にするまでに時間がかかります。林業の特殊性を鑑みると、今後どのようなことが求められるのでしょうか。



大塚洋一郎氏 島田泰助氏 内木篤志氏 渡辺偲規氏 高原一郎氏 大山耕二氏